

I

■出題のねらい

近年の社会情勢の変化に伴う、修学旅行のあり方の変容をテーマとした英文記事を読み解く問題です。円安やオーバーツーリズム（観光公害）といった現代的な課題が、学校教育の現場にどのような影響を与えているか、具体的な数値や事例をもとに理解する力を問いました。

文章は、従来の「観光名所巡り」から「探究学習・体験型」へとシフトする傾向や、行き先が海外や定番の京都から、地方都市や国内回帰へと変化している背景を論理的に追う構成となっています。単語の意味を文脈から推測する力、構文を正しく把握して語句を整序する力、そして英文全体の論旨を正確に把握する総合的な読解力を測ることを意図しました。

■採点講評

正答率は60%でしたが、設問によって理解度に差が見られました。特に苦戦が見られたのは、整序問題の で、正答率は36.3%でした。「かつてのように人気のある寺社を訪れることはもはや不可能だ」という意味になるよう、It is no longer possible to visit popular... と語句を並べる必要がありましたが、“no longer”（もはや～ない）の語順や、仮主語の“it”と真主語の“to visit”の構文把握で躓いた受験生が多かったです。

また、 の空所補充（正答率43.5%）では、文脈上、海外旅行から「国内（domestic）」旅行へ切り替えたという文脈を読み取る必要がありましたが、直前の「海外への修学旅行」という語句に引きずられ、対義語である「foreign」を選択した誤答（26.3%）が目立ちました。前後の文脈（対比関係）を正確に読み取る力が求められます。

一方、内容一致問題である は正答率65.8%で、時間をかけて丁寧に読めば大意をつかめている受験生が多かったです。

II

■出題のねらい

友人同士の旅行に関する会話を通じ、情報のやり取りの流れを正確に把握する力を問う問題です。具体的な旅行先でのエピソード（ゴルフ、景色、虫、夕日など）について、質問と回答の整合性を判断する能力が求められます。

会話特有の省略や、指示語が指す内容、さらには話者の感情や反応を手がかりに、文脈に適した発言を選択する実践的なコミュニケーション能力を重視しました。

■採点講評

会話の流れを追う基本的な力がある受験生は多かったものの、細部の情報照合で誤答が見られました。

11 の正答率は48.1%でした。ここでは、直前の Meg の質問に対し、Jill が「驚いたことに、それが旅行の最も楽しい点の一つだった」と答え、その後に「彼がゴルフをしている間、私はコース周辺を散歩した」と続けています。このことから、Meg の質問は「二人でゴルフと散歩に忙しかったの？（ゴルフばかりしていたわけではないの?）」といった趣旨の選択肢④ではなく、「ジムはたくさんゴルフができたの?」という選択肢①が最も適切となります。会話の「直前」だけでなく「直後」の応答内容まで視野に入れて推測する力が不足していたようです。

一方、9 や 13 は約7割の正答率があり、話題の転換点や感想を問う基本的な質問に対する理解度は良好でした。

III

■出題のねらい

クロアチアに実在するユニークな博物館「HaHaHouse」を紹介する英文を題材に、語彙力、文法知識、および詳細な内容把握力を問う問題です。

コロナ禍という時代背景から生まれた「笑いによる癒やし」というテーマを扱っており、筆者の意図や登場人物（心理学者や訪問者）の心情を理解することが求められます。また、比喩的な表現や、文脈に応じた適切な語形変化、指示語の特定など、文法・語法の正確な知識を運用できるかを問いました。

■採点講評

興味深いテーマであったためか、全体的によく読めていましたが、比喩表現の理解で差がつかれました。

18 の正答率は46.1%でした。文脈として「大人が子供のように振る舞える」「子供時代の喜びを取り戻す」という記述があることから、博物館に入ることは「子供時代に入り込むようなもの (entering childhood)」という比喩を選ぶべきでしたが、直感的に「博物館に入ること (entering the HaHaHouse)」を選んでしまった誤答が散見されました。

また、内容一致の 23 (正答率46.6%) では、心理学者の発言内容を問いましたが、選択肢④「笑いが人を傷つける武器になりうる」は本文の「笑いは問題に立ち向かう力を与える武器」という主旨と矛盾しています。単語 (weapon) のイメージだけで判断せず、その修飾語句や文脈上の意味 (ポジティブかネガティブか) を慎重に判断する必要があります。

文法事項である 20 (不定詞の形容詞的用法に関連する内容把握) は正答率93.8%と非常に高く、基礎的な読解力は十分に備わっていることが確認できました。

IV

■出題のねらい

友人同士の買い物やカフェでの会話を場面ごとに切り取り、状況に応じた適切な応答表現を選択する問題です。

待ち合わせの遅刻、価格交渉、味の感想、別れの挨拶といった日常的によくあるシチュエーションにおいて、相手の感情に配慮した表現や、文脈に即した慣用的なフレーズ（イディオム）を使いこなせるかを問いました。単なる直訳ではなく、英語特有のコミュニケーション感覚が求められます。

■採点講評

短い会話文でありながら、正答率に大きなばらつきが散見されました。

最も難度が高かったのは、カフェでの会話における で、正答率は29.4%と問題全体の中で最も低い結果となりました。「私のお茶は少し苦い」という発言に対し、相手の感覚に共感を示す“I know what you mean.”（言いたいことはわかる／その気持ちわかるよ）を選ぶべきでした。しかし、“I’d rather do that” (25.1%) や “So do I” (24.8%) といった誤答が散見されました。“So do I” は「私もそうです（私も苦いと思います）」という意味になりますが、相手のカップの中身に対する感想としては不自然であり、また直前に “usually think so” とあるものの、今回に限っての「苦い」という感覚への同意としては文脈が弱いです。

一方、遅刻に対する許容を示す “No problem.” は正答率78.3%と高く、定型的な挨拶表現はよく理解できているようです。